

21. 台湾高砂属住家の研究

(第5報 アミ族)

文部技官 文部省教育施設部葛松工務事務所長 千々岩 助太郎

(はしひま) 高砂族とは台湾原住民族の日本的呼称であつて、中華民国に復帰後は高山族と呼ばれてゐる。人口約15万、7種族に別れているが、アミ族は東部一帯の平均に居住し、全種族中最大の種族であつて、昭和15年末の調査に依れば戸数6901、人口53,266名である。性質温順、能く労働に堪え、進化の程度も亦着るしく、日本領有当時も他の種族と異り、大正3年以來、普通行政の治下にあつた。漢民族と雜居するもの多く、その文化乃至生活様式も殆んど漢族化したものが多い。これを南勢アミ(北部)海岸アミ(海岸山脈以東の中部)、季姑歪アミ(海岸山脈以西の中部)、卑南アミ(南部)及び鹿寮アミ(最南部)の5部族に分ける。

1. アミ族の発祥とその移動

アミ族の分布区域が東海岸地方の平地に沿つて細長く南北に伸びて居り且その間に少なからず異種族が介在するため言語、習俗等に於ける地方妙相違は多くなり着るしいものがあり、又彼等相互間の連絡が充分に行はれていないので今一事項についてすら口碑の伝へるところが必ずしも一様でないことがある。例へばこれを移動口碑について見ると、既述のアタヤル族⁽¹⁾は現住地の西岸臨より北方或は東方に向つてブヌン族⁽²⁾及びパイワン族⁽³⁾は夫々西北臨より南方或いは東方に向つて移動しているが、アミ族に於ける移動は多くの如く一定方向に概括することゝ困難であつて或は一度北上して再び南下せるもの、或はその反対のものなどあり、移動経路は甚だ複雑であつて南方では北方起源を伝え、反之北方では南方起源を称するなど、西口碑を比較対照して実際には或は環状の移動経路なることも屡々見出される。又発祥伝説についても、アミ族間に伝へられる説話には数ヶ所あり、この問題を一層糾糾せしめる。祖先発祥の伝説には洪水伝説の形式で語られるもの、海外島嶼よりの渡来説を伝へるもの及びアラパナイ⁽⁴⁾を發祥地とするものゝ3つの型がある。海外島嶼は火燒島、紅頭嶼などが多く挙げられてゐる。

- 1) 昭和25年8月日本建築学会研究報告第7号 P103
- 2) 13年5月 〃 春季大会予
- 3) 11年5月 〃 〃
- 4) 台東南方の海岸でパナパナマンと云はれる。
- 5) 台湾東方の島
- 6) 〃 東南の島

2 アミ族の住家形式

アミ族は上記の如く台湾東部一帯の平地に居住し、高砂族中最大の種族であるが早くより漢族と交渉繁く、殊に日本領有以後に於ては日本人の移住によつてその感化を受けること多く、住家も又漢族或いは日本人の影響を受けて着るしく進化し、都市に近い部落に於ては土角造、煉瓦造等の漢族式の住家或いは木造の日本式住家なども見られる様になつた。また上記の如くその移動状態も環状をなし、住家の形式構造なども甚だしく共通、混淆して、地方的に或は部族等によつて、判然と区別することは困難である。住家は總て平地式であつて、これを大別して單室平入型と複式妻入型とに分せられ、前者は主として北部地方の部落に、後者は主として南部地方の部落に分布し、中部地方の部落に於ては両者が混淆している。最南部地方に於ては全く漢族式住家と識別し難いまで変化し、各地方とも遂次漢族式に移行して行く様である。

- 4) 單室平入型 平面は矩形、切妻屋根平入、前面に吹抜土間があつてその中央に入口が設けられる。室内は單室で全部に床が張られ、大きな炉穴2ヶ所あつて、その上部には棚が吊られる。
- 5) 複室妻入型 平面は矩形、切妻屋根妻入、広い踏込土間があつて雨天に於ける作業場として用ひ、その一部に炉及び炊事場が設けられ、両側面及び背面壁に沿つて凹室型に床が張られ、敷室にかけて寢室として用ひ、土間及び各室の境には低い障壁が設けられるのが普通である。

3. アミ族住家の構造

アミ族住家の型式は上記の如く又兼に大別出来るが住家の構造は全種族殆んど全同であつて、木造切妻、茅葺である。但し最南端の恆春地方に於ける土角造及び最近用ひられるようになった煉瓦造或は木造日本風の住家については本研究に於ては触れない。

住家主要部の構造及び材料は次の通りである。

- 1) 柱 主として断面矩形で、多くは扁平な木柱を用ひ、往時は障樹が多く用ひられて居たが、最近には楠仔^{ナツ}などが多く、何れも堀之柱である。稀には竹柱が用ひられることもある。
- 2) 壁 茅葺、竹壁及び板壁に区別され、土塗壁は全くなく壁貫には竹又は丸太が多く用ひられる。
 - 1) 茅壁 最も多く使用される壁構造であつて茅の葉を縦、横に並べてその両面に茅の茎を縦に密に並べ更にその両側に茅茎或いは割竹を約30程度に当て、これを結束したもので、壁厚は10程乃至1

2種位である。粗末なものは両側の茅の茎を有したのものもある。

四) 竹壁 周仕切壁等に多く用ひられ、割竹或は細い竹を縦に並べたものである。

ハ) 板壁 單室平入型住家の前面壁に多く用ひられ、厚板を柱間に横に並べて納入としたもので殊に外壁全部に下見板を張ったものもあるが最近の手法であつて在来の構造ではない。

3) 屋根 屋根は総て切妻茅葺である。屋根下地は屋根面を4又は6分して簾又は小さな竹を簾の如く編んで作りこれを軒拵及び椽木に結束し茅の葺足は約30種である。

4) 床、根太には太い竹が多く用ひられ、これを板片の末を以て支え、床は屋根と全じく簾又は小さな竹を簾の如く編んだものを以て張られている。

5) 炉 北部地方の單室平入型住家の炉は1.5米角位の大きさがあつて地盤より床面まで盛上してその周囲には頑丈な木の枠が鉄められているが南部地方の複室妻入型住家の土間に設けられるものはアタヤル族等のものと全じく3本の細長い石を小羽立に鼎立したものである。又炊事場を別棟に建築するものに於ては漢民族式に塗土の竈を造つた例もある。

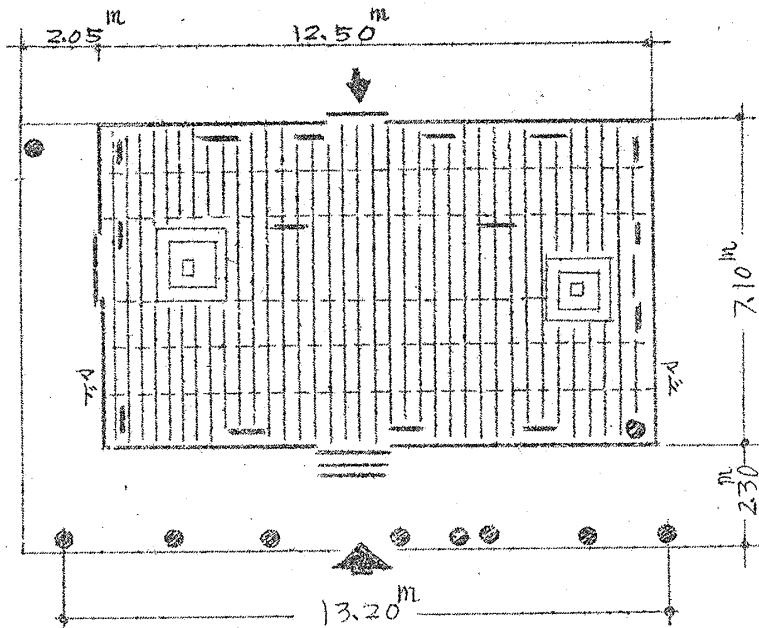
6) 開口 入口には頑丈な片開き或は両開きの板戸が附けられたものが多く、何れも軸約である。窓には竹の編んだものを釣り下げて必要に全じ葺の如く押し上げるようになってゐる。

4. アミ族住家の実例

1) カキタアンの住家(花蓮港府鳳林郡鳳林街富田、^{タバロシ}太巴壠社、才1図)
單室平入型の典型的のものであつて昭和10年12月台湾總督府支庁名勝天然記念物調査委員会に於て支庁として指定保存されたものである。平面は矩形、東及び西側に下屋を有し東側下屋は炊炊き土間のまゝである。南側の軒出殊に深く、これを支へるために柱が建てられている。軒高3.15米、椽高4.45米、平入で東側に入口が設けられ、戸は内側へ開く両開き板戸で、板戸には人像が彫刻してある。

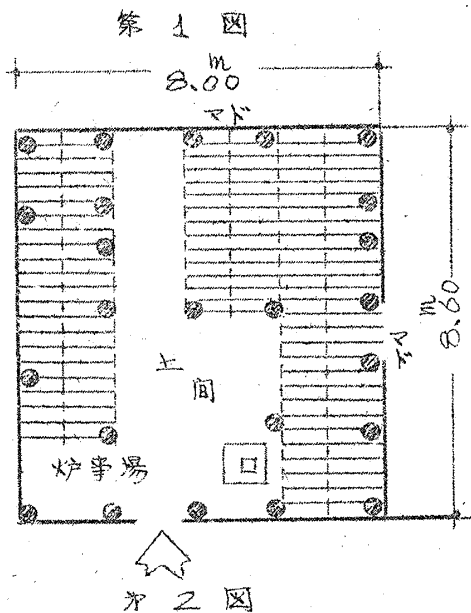
南側妻壁及び西側壁にも入口が1ヶ所宛設けられ、南側入口に板戸がなく西側入口には内開き板戸が設けられて居る。窓は西妻壁に1ヶ所宛あつて竹を編んで造つた押し上げ戸がある。屋根は切妻茅葺であつて、屋根下地は全体を6分して造られ、簾及び小さな丸竹を簾の子の如く編んだもので、これを椽木及び軒拵に結束し、茅の葺脚は25~30種であ

る。屋内は全部床が漲られ、北妻壁近くの一部は板敷き、他は全部藁張りで、床高は45種あり、西加妻の近くに大きな炉が2ヶ設けられている。主要な柱は幅45〜94種、厚さ6〜16種の扁平な盤木が用いられ木で組社移住当時の祖先に関する様、特殊文様等を描き或は彫刻してある。



6) ラウの住家 (台東区新港郡長沢)

キナルカ社、オ2図)、被室妻入型の基本的なものの一例である。平面は矩形、軒高2.48米、軒高3.50米であるが、南北西側に下屋がある。妻入で入口には内側に開く面開きの戸があり、戸は茅の茎を編んで作られている。窓は北側壁に1ヶ所あつて押上げ茅戸が取付けてある。屋内は中央は土間のまゝで周壁に添つて3ヶ所に区分して床を設け、障壁も茅茎で作られ、各室とも寢室に用いられる。



5. 附属構造物

住家の附属構造物としては集会所、教倉、仕事場、畜舎、頭骨架等があつて集会所、教倉、仕事場等の構造は住家と全く全様である。

1) 集会所、各社に数ヶ所設けられ、往時はこゝに歩哨をおいて外敵の見張りとしたものであるが、現在は主として青年の集会、宿泊及び社の会議場或いは共同作業場として用いられている。その平面は住家と等しく北部地方と南部地方とによつて異なる。即ち何れも矩形であるが北部地方のものは吹抜きで全面に床が漲られその中央に炉が設けられ、南部地方のものは前面のみは壁を設けなれが西側面及び背面には壁を繞らし、屋内も周壁に沿つて凹字型に床を設けて寝台とし前面は土間でその中央に炉がある。

2) 頭骨架 老翁の住家の前にあつて高さ1.200米、巾1.80米、奥行90種位の小屋で頭骨は上より吊しその下に棚を設け小屋の前には直柱30種位の石を置きこれらは豚を放つて屠るとき用いたものであると云はれているが、現存するものは全くない。 —1951.9.21—